

石森国語の成立と満洲

——その基盤としての『満洲補充読本』——

磯田 一雄

一、石森延男と戦中・戦後の国語教科書改革

戦前の満洲（中国東北地方）に関係した日本人の教育活動のなかで、間違いなく戦後の教育Ⅱ教科書改革にその影響を及ぼしたとみられるものに、理科・国語・社会科の成立に関係する改革がある。石森延男（一八九七年—一九八七年）の国語教育の仕事はその典型であると思われる。それは彼の戦前・戦後を通じての国語教育における膨大な活動の基盤には、『満洲補充読本』の編纂を中心とした、満洲での活動があると見られるからである。これは一部で既に

指摘されてきたことではあるが、最近、最初期に発行されたものや、最後の段階での「国民科大陸事情」への移行をも含めて、『満洲補充読本』の全容がかなりつかめてきたので、その事実を具体的に指摘しておく意義があると考える。⁽¹⁾

石森延男先生が偉大な国語教育者としてたたえられる業績の一つに国語教科書の編集がある。しかも、ただ単なる編集だけではなく、自らのペンで数多くのすぐれた教材を執筆されているところに大きな特異性がある。そして、石森先生にとって、国語教科書の編集と執筆とは、国語教育そのものに対する思索、信念、新しい見解の具体化、具現

化でもあったところに、「偉大な」のこたばを付せずには
いられないのである。²⁾

実際に国語教育のばあいは、石森という一人の人物が、
「戦前」『満洲補充読本』→「戦中」第五期国定国語教科書
→「戦後」暫定国語教科書→「戦後」第六期国定国語教科
書」というように、明確にそれぞれの編集の責任ある地位
にいたという点で大変珍しい。ほかの領域にこういう例は
おそらくあるまい。第二にその改革は、一つには「文学」
+「言語教育」としての国語教育の成立というように大変
輪郭がはっきりしている。教科書における「文学性」の確
立は井上越の「サクラ読本」に始まり、石森はこれを引き
継いだとみられるのだが、自らも児童文学をよくした石森
は、井上以上に国語教科書の文学性の確立に貢献した。こ
れは戦後国語教科書のジャンル別教材の比率を見ればわか
る。一方言語教育としての国語教育は石森の作成した「コ
トバノオケイコ」に始まるのであり、明らかに彼の独創で
ある。これは戦後の占領軍の指導下で教科書のなかで発展
して行く。

それにしても、石森延男という人は不思議な人である。

戦前・戦中・戦後と性格の対照的に異なる教科書の編纂を
し名を成したのである。初等科修身を担当した竹下直之の
配下にあつた勝田守一のように、比較的戦中の後期に入っ
てそれほどの重要な仕事をしたとは思えない人が、戦後残
つて大きな仕事をした例はあるものの、イデオロギー教科
の中心である国民科国語の教科書編纂のために、石森ほど
早い時期に文部省に入つて、相当の仕事をした人が、その
まま戦後追放どころか、戦後のもっとも重要な時期に画期
的な仕事をなしたのであるから。

それは換言すれば、石森が満洲時代に確立した国語教育
や国語教材が戦後も一貫して支持されたことを意味すると
も言える。「特に、太平洋戦争をはさんで、戦前の仕事と
戦後の仕事を全体としてどのように評価すべきかというこ
とは、非常に難問である³⁾」という渋谷孝の指摘がそこに生
ずる。もつとも「石森延男の戦前の仕事と、それと全く対
照的な戦後の仕事の意味……」（傍点＝筆者）という点には
若干の問題があろう。それは本当に「対照的」であるのか
どうか、「満洲」時代の石森の評価によって変わってくる
と思われるからである。

教材の面での『満洲補充読本』の国定国語教科書への具

体的な影響をちよつと見ておこう。明らかに満洲にその根があると思われる教科書教材は、「朝の大連日本橋」や『「あじあ」に乗りて』のように既に「サクラ読本」（第四期国定国語教科書）にもその例があるが、石森が直接編纂を担当した「アサヒ読本」（第五期国定国語教科書）になるとその例が一層多くなる。その典型は「西ハ タヤケ 赤イ クモノ東ハ マルイ オ月サマノカウリヤン カッテ ヒロイナアノドッチヲ 見テモ ヒロイナア」という、島木赤彦作の童謡である。これは大正十三年に発行された最初の『満洲補充読本 一の巻』の代表的な教材であるが、石森はこれがことのほか気に入らしく、「アサヒ読本」から戦後の暫定教科書にまで引き継いで使用している（「アサヒ読本」の『ヨミカタ 二』では「西ハタヤケ」という課で、満洲のおじさんに送ってもらった、「マンシウノ子ドモタチノヨム本」の中に載っていた「ウタ」ということにされている。「パンハジメニ、マンシウノ空ノウツクシイコトガ、カイテアリマシタ」とあるから、送ってもらった本とは実は『満洲補充読本』の「一の巻」だということがわかる。この教科書は、その後間もなく使用されなくなったはずだから、石森はこの課をあるいは『満洲補充読本』への葬送行進曲のつもりで作成したのかもしれない。

石森はさらにそれを四学年の「大連から」でリフレインする念の入れようである。暫定版では満洲を北海道に変え、「カウリヤンカッテ」の行を削除している。

ついでにいえば、第五期国定国語教科書で行われた、五・六年用の教科書に「付録」をつけるという画期的な試みも『満洲補充読本』の影響ではなからうか。付録とは補充教科書ならぬ補充教材であつて、『満洲補充読本』のように自由に扱える——場合によっては扱わなくてもいい——という含みがあつたのではないか。またこの付録では石森は自分の思うがままの教材を入れられたのではない。特に、五学年の『初等科国語』の付録は二冊とも大陸のものであり、まさに石森の独壇場であつた。これに比して、六学年は南方が中心でしかも特に後期はなまなましい戦闘場面ばかりであるから、石森の出番はなかつたらう（こうした太平洋戦争の戦闘そのものの登場は、編纂に要する時間の関係が五・六学年用ともに後期用に集中しており、これには随分軍部の圧力がかったものではなからうか。あるいはこんなことで石森も、井上超にならつて文部省を辞めたくなつたのかもしれない）。

さらに戦後石森は教科書編纂のほかに、『竹』という小

学生のための全十二巻の豪華な副読本を光村図書から発行（二九五〇年）して、「付録」ではなく、まさに補充読本の充実という形で発展させようとした。⁵⁾ 石森はいつも「こんな薄い教科書だけではしようがない。教科書は教師が自分で教材を開発する手がかかりだ」といつていたというから、「正教科書」と「補充読本」の併用をしごく当然のこととしていた満洲の国語教育の実態を、戦後に生かそうとしたのであると思われる。

「石森延男自身は……旧「満洲」国時代の仕事について、晩年まで郷愁のような懐かしさを抱いていた」と言われる。⁶⁾ そして世にはその石森が作ったとされている『満洲補充読本』に、限り無い郷愁を抱いている、旧「満洲」帰りの人々が大勢いる。戦中の満洲で始めて国民学校に入学した人々はどうほとんど使用する機会がなかったのではないかと、と思われるのだが、この『満洲補充読本』が復刻されるにあたり、これを編集した石森延男は次のように書いている。

満洲をふるさとした子どもたちは こうした身近かな教材にひかれて心から迎えてくれた 教師たちも 国定読本より補充読本を はるかに熱をもって教える

ようになった 「満洲補充読本」の表紙は 満洲の土の色をあらわす黄土色にし 挿絵も色刷りにした 子どもたちはいよいよたのしんだ（中略）

今でこそ満洲は異国になってしまったが 幼年時代に心に芽ばえたあのひろびろとした曠野 よくはれた夜空 紅いサンザシ あたたかい甘栗など けっして異郷のものではあるまい 人間のよさは国境を越えたところにあると思う 中国といよいよ近づいて 仲よくなりたいたいものである 「満洲補充読本」は小さいものだが これによって 国境を越えたくさずなが たとえ細々としても切れることはないと信じている 教科書編輯部の存在は意味深いものがあつたと思う（中略）

「満洲補充読本」は けっして国威発揚を掲げたものではない 敵愾心をそそるものでは断じてない 当時としては危険視されるほどの 人間性を帯びた自由性の豊かな教科書であつたのである（傍点＝筆者）

石森の「郷愁」は当時大陸で生活した経験を持つ多数の日本人の「郷愁」を代表する、少なくともその本質を教育ないし教科書の世界で解き明かす鍵になりうるものと考えら

れる。その「郷愁」には明らかに一種の普遍性が前提とさ
れていると思われるからである。こうした石森の「満洲意
識」については、渋谷は「……戦前と戦後の仕事について、
つねに自分の仕事は間違っていないかったという、心情に支
えられている。歴史的根柢についての意識の欠落した観念
的なロマンチズムと言えようか。」⁽⁸⁾と言っている。それ
は「満洲」に「ロマン」を感じる日本人の気持ちを代表す
るものといえよう。しかもその「ロマン」は戦後日本の国
語教育の基調をもなすに至ったのである。それはどのよう
な「ロマン」であるのか、その本質が今究明されねばなる
まい。

日本の植民地の中で「満洲国だけはロマンがあった」と
よく言われるそうである。筆者は中国東北部の植民地化を
いかなる意味においても決して肯定するものではないが、
この「郷愁」が何に由来するものであるかは、教育を含め
ての戦後文化全体の問題として究明されるべき思想的価値
があるものと考ええる。思うにその一端は、満洲で実験され
開発されたさまざまな先進的な試みが、現代社会の中で生
きている、少なくとも一定以上の役割を果たしてきたため
はなかるうか。石森延男の国語教育における仕事も、その

一端を形成するものであろう。

二、石森と『満洲補充読本』の出会い

八木橋雄次郎は『満洲補充読本』との出会いを次のよう
に書いている。

そのころのことであるが、「満洲補充読本がこのよ
うにできあがったよ」とおっしゃって、できたての教
科書を見せていただいたことがある。なぜだったのか、
石森先生とわたしが二人だけで町を歩いていたときで
あった。夕暮れでよく内容が見えないので、近くの喫
茶店に入って見せていただいた。一年生一冊だけであ
ったか、六年生まで六冊全巻であったか記憶にはない。
が、一年生の教科書だけが強烈に眼底に焼きつけられ
て、今なお記憶に残っている。

第一ページは、四色刷の口絵になっていて、満洲に
よく見られる広大な原野に羊が群れて草を喰べている
風景であった。数十匹の羊の群れに牧人がひとり、二、
三本の樹木があり、あとは広々とした満洲の野と空で

あった。わたしは、「あつ」と驚いた。ページをめくっていくと、「サカミチ」という二ページ見開きの詩があり、その上段はこれまた二ページ見開きの四色刷の大きなさし絵になっていた。大連病院への広い坂道が連想された。さらにページをめくっていくと、「サカミチ」と同じように上段は見開きの色刷のさし絵、下段は「ユフガタ」という詩になっていて、見るからに大らかな満洲を感じさせるものであった。(中略)

文部省の黒一色の教科書になじんできたわたしなどにとつては、これが教科書かと目を丸くしてながめいったものである。当時のことであるから、印刷技術の発達した今日から見れば四色刷のさし絵とはいえ、不手際な印刷であったかもしれないが、たいへんな改革であり、進歩であった。やがてわたしは、「満洲補充読本」全巻に目を通すことができた。

石森が八木橋に「このようにできあがった『満洲補充読本』」を見せたのは正確にはいつの話であろうか。現在復刻されている『満洲補充読本』の「一の巻」の内容はほぼこの通りの内容のものだが(色刷りの箇所など一部八木橋の

いうところと違う)、昭和十年三月三十一日初版発行になっている。八木橋が石森に出会ったのは昭和五年の四月上旬であるというから、この「そのころ」とはだいぶ隔たりがある。石森は昭和七年に視学に転出しているし、それに色刷りの教科としてはかの有名な「サクラ読本」が昭和八年に出されているから、それより後では印象が薄れよう。どうしても昭和五、六年頃の発行でないと話が合わないことになる。

八木橋はこのとき初めて『満洲補充読本』が生まれたかのように書いているが、実は石森の大連着任以前に、『満洲補充読本』は既に存在していた。それは今日普通に言及されている菊判(昭和十年頃までの旧版)やA5判(昭和十年代の改訂版)とは異なる薄い四六判の『満洲補充読本』で、内容もかなり異なるものではあったが、確かに南満洲教育会教科書編輯部によって、既に大正年間から発行されていたのである。¹⁰⁾初版の発行年代を示すと次のようである。

- 一の巻 大正十三年十月二十日
- 二の巻 大正十四年三月三十日
- 三の巻 大正十五年二月二十八日

四の巻 昭和二年三月二十八日

五の巻 昭和三年三月二十七日

六の巻 昭和四年二月二十五日

高一の巻 昭和五年四月四日

高二の巻 昭和六年二月二十八日

「三の巻」までは明らかに石森の大連着任以前に編纂されたものである。また「四の巻」以降についても石森の着任以前にかなり編纂が進んでいたが、石森の手になる教材が加わることは可能であった。つまり八木橋のいう『満洲補充読本』の「一の巻」は、右の大正十三年発行のその「改訂版」だったわけである。

それでは「一の巻」などの四六判から菊判への改訂作業は、果たしていつから手がけたのであろうか。南満洲教育会教科書編輯部の昭和七年度の「教科書用図書一覽」を見ると、『満洲補充読本』の「一の巻」は「改訂版」、「二の巻」と「三の巻」は「改訂新版」とそれぞれ下に注記されている。「一の巻」は昭和六年四月に、「二の巻」と「三の巻」はそれぞれ昭和七年の八月と四月に改訂され、四色刷りの口絵が入るようになった。そこで八木橋が見て感激した「一

の巻」は、多分昭和六年度の改訂版だったということになり、時期的にも符号するのである。総べての巻の初版の編纂と、「一の巻」―「三の巻」の改訂が一応終わった段階で、石森は南満洲教育会教科書編輯部を離れたのである。しかしその後の改訂作業においても顧問的な立場で参加していたらしい。それにしても昭和五年という時点で大連に赴任しながら、八木橋はこうした事実には気づかなかつたのであろうか。小学校の現場にありながら、どの巻であれそれまでに使われてきたはずの四六判の『満洲補充読本』の存在を全く知らなかつたとは理解しにくいことである。知つてはいたが言及する必要を認めなかつたのであろうか。そこで『満洲補充読本』の改訂状況をまとめてみると次のようになる。

◎「一の巻」―「三の巻」

最初の版

大正十三年―十五年。四六判で、石森は編纂に加わっていない。

第一次改訂

昭和六―七年。四六判から菊判になり、教材も大幅に差し替えられた。石森の教材が大幅に入る。巻頭に色刷り口絵が入

る。

第二次改訂

昭和十年。口絵や表記法の変更など微調整で教材に大きな変更はなかった。

第三次改訂

年代不明。奥付では改訂と認定できない。菊判からA5判へ。ごく一部を除き、教材には変化がない。挿し絵は全面入れ替え。

◎「四の巻」～「六の巻」

最初の版

昭和二年～四年。石森が編纂に加わる。四六判の旧態を踏襲する。始めから石森の教材を掲載している。

第一次改訂

昭和八～九年。四六判から菊判になり、教材も大幅に差し替えられる。巻頭に色刷り口絵が入る。

第二次改訂

昭和十年。微調整。

第三次改訂

昭和十三年。菊判からA5判へ。再び大幅な教材の差替えが行われる。挿し絵も全面入れ替え。巻頭色刷り口絵も大幅に変化。

◎「高一の巻」～「高二の巻」

最初の版

昭和五～六年。四六判で石森も編纂。

第一次改訂

昭和十～十一年。巻頭に色刷り口絵が入る。「四の巻」～「六の巻」の第二次改訂に相当する教材の大幅な差し替えがあった。

第二次改訂

年代不明。奥付では改訂と認定できない。菊判からA5判へ。教材には変化がなかったと見られる。挿し絵（大部分写真）にも変化はないが、巻頭色刷り口絵は除かれている。

こうしてみると『満洲補充読本』の改訂は、一学年ずつではなく、一挙に数学年行われた場合が多い。

渋谷孝は、石森と『満洲補充読本』との関係については次のように説明している。

「石森延男は一九二三（大正十二）年三月に東京高等師範学校を卒業後、愛知県渥美郡田原町の成章中学校に奉職し、その翌年には香川県師範学校・教諭に転出

した。ところがそれも束の間、一九二六（大正十五）年には、旧満洲国（中華人民共和国東北区）の大連にあって南満洲教育会教科書編輯部に赴任した。二十九歳の時であった。その任務は、その当時旧満洲国に住んでいた日本人家族の児童に小学校の国語科副読本を編集することであった。それは『満洲補充読本』（全六巻）として完成した。この仕事は後の石森の仕事と思考法に大きな影響を与えた。」

さらに、『満洲補充読本』が、昭和期の日本の教育上の植民地政策に果たした役割は少なくないが、本格的な研究はまだなされていない。石森延男の国語科教育と国語科教育政策についての仕事は、この『満洲補充読本』との巡り会いから始まっている。……石森は、一九二六（大正十五年）から、一九三二（昭和七）年まで、足かけ五年間にわたってこの仕事に携わって全八巻を完成させて、その任務を果たした。そして昭和七年には大連民政局地方課学務係視学官として着任して、約六年間務めて、一九三九（昭和十四）年（四十二歳）に、文部省図書局図書監修官に任命されて、日本に帰った。（中略）石森は「満洲国」への熱い「望郷」

の念を最後まで持っていた。」と指摘している。⁽¹⁾（傍点＝筆者）

これまでの石森研究では、石森国語のそもそもの出発点となる『満洲補充読本』の全容が必ずしも正確にとらえられていない恨みがある。それは繰り返しになるが、（イ）まず『満洲補充読本』が石森の大連に渡る前に構想され、その一部は既に編纂・発行されていて、石森はその仕事に遅れて後から参画した、（ロ）さらに石森自身が加わった改訂を含めて、『満洲補充読本』は途中で何回か改訂されており、その発行された時期によって教材にかなり重要な変遷があった、という二つの重要な事実が軽視ないし無視されているように思われることである（特に「イ」の事実は従来ほとんど無視されており、そのために『石森延男国語教育選集・第五巻』の末尾の「石森延男執筆教科書教材目録」には、『満洲補充読本』の「初版」発行年代に誤りがある。そしてこの「改訂」の実態が石森の仕事や思想の評価にあたって、非常に重要ではないかと思われるのである。

石森はこういう意味で『満洲補充読本』との巡り会いをしたのだが、さらに彼の仕事は機構上は南満洲教育会教科書編輯部の一スタッフとしての仕事であり、朝鮮総督府

の嘱託であつた芦田恵之助のような個人の仕事ではなかつた。また石森の仕事の中には、当然新しい巻の編纂のほか、既成の巻の増改訂も含まれているわけである。石森自身立場でいえば『満洲補充読本』を、「足かけ五年間にわたつてこの仕事に携わつて全八巻を完成させて、その任務を果たした」ということになるであろうが、あたかも石森一人で作りあげたかのように過剰評価することは慎まなければなるまい。石森の教科書編纂上の力量や努力が非常に大きかつたことは事実であるにしても、当時の『満洲補充読本』の編纂の実態を無視しては正しい評価が困難になるであろう。石森と『満洲補充読本』は切つても切れない関係にあるように一般に思われているらしいが、『満洲補充読本』のアイデアや原形は石森のものではなく、彼はそれを発展させる上で功績があつたのだ、ということを確認しておく必要がある。

三、『満洲補充読本』改訂の実態（本節に限り石森執筆教材は左または下に*印を付す）

満洲では本来の植民地教育のための現地民教育用教科書のみならず、数多くの日本人用補充教科書ないし正教科書が編纂・発行されている。同時に満洲には一種独特の「新教育」の運動ないし実践活動が行われている。この事実が日本の教育史の上で持つ意義は極めて大きい。というのはある意味で新教育の歴史は「補充教材」「補充教科」さらには「補充教科書」（副読本など）の歴史だといつてもいいからである。成城学園の場合などはその典型である。よく日本の戦前の新教育運動は方法の改善が中心であつて、教育内容の批判や改善が欠けているようにいわれることがある。この批判は同じく「新教育」と呼ばれてはいるが、師範付属系ないし先進的公立学校での実践においてはかなりあてはまるが、私立学校系の実践においては必ずしもあてはまらない。かれらは教育内容をかなり自由に取捨・選択しているからである。それと同じように「新教育」の実現の観点から、満洲の日本人用教科書全体を見直してみる必要があるのである。実際かれらの学校は満鉄が設立・経営

している学校であり、視学の目を通しての文部省の管理・統制が及ばないという意味では、基本的には内地以上に私学系の実践として位置づけられるべきであろう。

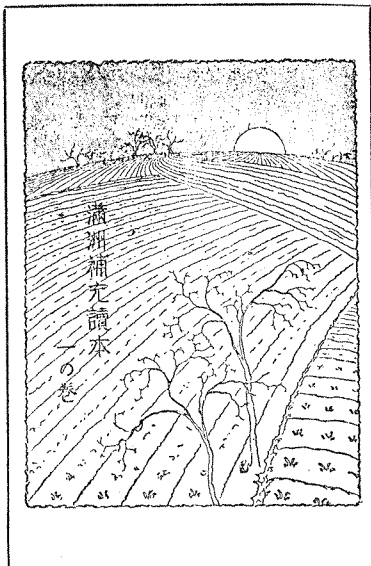
『満洲補充読本』の「一の巻」(大正十三年)はおそらく日本人用としては最初期に出来た満洲の現地編纂教科書の一つであったと思われる。それはおよそ従来の日本の(国定)教科書とはかけ離れた体裁と内容の教科書であった。まず表紙や挿し絵がいかにもいわば大陸的なとほけた感じで、国定教科書の窮屈な固い調子とは全く対照的である。

大きさは当時中国で使用されていた教科書と同じ四六判になっている。厚さも中国の教科書並みに薄い。「もくろく」を見てみると、教材の内容はその題名からして現地中国に取材したものである。すなわち中国(満洲)の風物と現地での日本人の生活を描いたものである。こうしてみるとこの『満洲補充読本』は、従来の植民地日本人教育の「内地延長主義」を脱して、地域性の濃厚な現地主義の教科書であることがわかる。

この『満洲補充読本』と当時の国定国語読本(ハナ・ハト本)を比べてみれば、いかにその落差が大きいかがわかる。『満洲補充読本』はまさに「児童文化」になりえてい

るのである。この落差は「サクラ読本」時代になってからも依然として大きかったといえるのであるが、ともかくこのような日本人用の補充教科書が、植民地統治の長かった台湾や朝鮮ではなく、时期的にも後発の、植民地としての性格もやや異質な満洲で生まれたという点がきわめて重要である。

そこで、どのように改訂していったかを見るため、まず最初期の『満洲補充読本』の「一の巻」(大正十三年)を昭



『満洲補充読本』一の巻(大正十三年収)の内表紙

『満洲補充読本』の改訂状況

【一の巻】

◇=教材の引継ぎ * =石森の執筆とされる教材
=国威発揚的な色彩の濃い教材

(符号は以下同じ)

大正13年版 (四六判)	昭和6年版 (菊判)
1、デムカハ	◇7 #**マソシウ
2、ハタケ	◇4 *サカミチ
3、レンダラ	*アソビゴト
4、ユフヒ	ハタケ
5、ユフガク	◇8 *エソソク
6、マソト	ランニンダ
7、マソノコホリ	デムカハ
8、シヤシン	◇17 ュフガク
9、バクチク	◇16 ュフガク
10、コトリ	◇13 ラチオ
11、シロイコゾク	◇12 ガクカウアソビ
12、_____	*クダモノ
	コモリウケ (改題)

大正13年版 (四六判)	昭和6年版 (菊判)
13、_____	バクチク (大幅改訂)
14、_____	*ベチガトスズメ
15、_____	*ロシヤバシ
16、_____	シヤシン
17、_____	*マソノコホリ (一部改)
18、_____	*「ソ」ツイタマチ
19、_____	フユトハル
20、_____	キコリトクノ
	37ページ
	7行15字 = 105字
	総計 = 3885字分
	7行18字 = 126字
	総計 = 8190字分
	(110.8%増)

【三の巻】

大正15年版(四六判)	昭和7年版(菊判)
1、春が来た	春が来た
2、うちのひよこ	艦隊入港
3、にれの花	汽車通学
4、望小山	小さな駅
5、牛	うちのひよこ
6、町なみ木	マージヤさん
7、マージヤさん	*娘々廟
8、かおりやんと大豆	#*たのしい慰安車
9、りんご畠	水びかり
10、ちぬつり	米つきかに
11、ろば	望小山
12、ろばのすゞ	ちぬつり
13、猿まはし	*りんご
14、春聯	月が出て来る
⇨1	
⇨5	
⇨11	
⇨17	
⇨6	
⇨15	
⇨12	
⇨19	
⇨16	
⇨21	

大正15年版(四六判)	昭和7年版(菊判)
15、張良	こうりやんと大豆
16、汽車通学	猿まはし
17、夜汽車	町なみ木
18、黒いすずめ	*唐王殿
19、杜子春	ろば
20、おしぎな玉	#*守備兵さん
21、————	*春聯
22、————	ある犬の話
23、————	*おかあさんへ
24、————	夜汽車
25、————	杜子春
105ページ	120ページ
8行20字=160字	9行22字=198字
総計=16800字分	総計=23760字分
	(41.4%増)

【五の巻】

昭和3年版(四六判)	昭和8年版(菊判)	昭和13年版(A5判)
1、春	*月ごよみ	*月ごよみ
2、石の裁判	#日本人	*日本人
3、ぐちの漁場へ	鴨猟	*深い霧
4、五月一日	*深い霧	轆担漂流記
#5、崩れた砦	白鳩の精	鴨緑江の四季
6、鴨緑江の四季	#崩れた砦壘	#龍城記念祭
*7、朝の日本橋	鴨緑江の四季	蒙古ひばり
8、最後の一球	蒙古ひばり	#軍用犬の話
9、逃水	*朝の大連日本橋	*空の旅(経路は変更)
*10、孝婦河	最後の一球	#た、へよ清洲国
11、轎車	*空の旅	巡回診療班だより
12、砂場	#軍用犬の話	南坂で
13、テント生活	*孝婦河	*公主嶺の農事試験場
14、支那町	#鞍山製鋼所遠望	採集の旅から
15、窓ガラス工場	天幕生活	溝人町
16、郭駝のことば	採集の旅から	*バラ、イカ
17、千山登り	支那町	#昭和製鋼所遠望
18、りんご	*公主嶺の農事試験場	#移民村
19、蒙古の牧畜	十三重の塔	蒙古の牧畜
⇒23	⇒13	⇒13
⇒15	⇒9	⇒14
⇒17	⇒8	⇒15
⇒21	⇒30	⇒17
⇒20	⇒17	⇒14

【五の巻】

20、愛馬熊野 ⇨25
 21、大豆の出盛り ⇨26
 *22、御者と鞭 ⇨27
 23、蘇武
 24、満洲の冬
 25、支那年中行事 ⇨28
 26、大吹雪
 #27、二勇士 ⇨30
 28、
 29、
 30、

千山登り
 窓ガラス工場
 #たゝへよ満洲国 ⇨10
 #天晴れ南部選手
 蒙古の牧畜 ⇨19
 愛馬熊野
 大豆の出盛り
 *御者と鞭 ⇨24
 支那年中行事 ⇨22
 近道 ⇨29
 #二勇士 ⇨28

大豆工業
 日本の人形
 満人の年中行事
 *#崩れた堡壘
 *御者と鞭
 スケート祭
 #老松嶺トソネル
 黄土
 #二勇士
 近道
 *孝婦河(劇化)

159ページ

9行22字=198字
 総計=31482字分

187ページ

10行25字=250字
 総計=46750字分
 (48.5%増)

200ページ

11行25字=275字
 総計=55000字分

和十年（第一次改訂版にあたる）のそれと比較してみる。昭和十年に改訂された版（第二次改訂版）も教材に関する限り実質的に違いはない。ただし、促音や拗音の表記は小活字になっている。

『満洲補充読本・一の巻』大正十三年版

（文中の挿絵は省略）

一 デムカヘ

カアン、カアン。

「ニイサン、キシヤ、ガ、キマシタ。」

「アブナイ、カラ、コツチ、ヘ、ヨ

ツテ、オイデ。」

「アア、アソコ、デス。アソコ、ニ

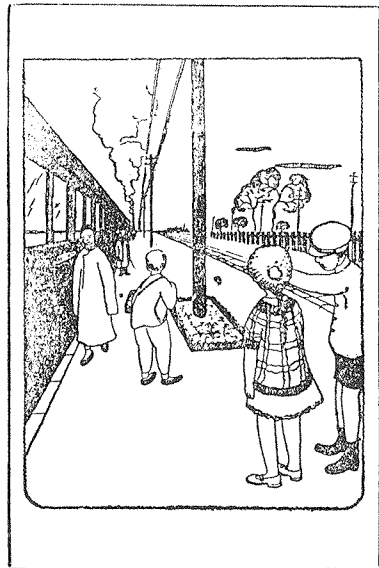
タツテ、ニコニコ、ワラツテ、イ

ラツシヤイマス。」

「オトウサン、オカヘリ、ナサイ。」

「オトウサン、オカヘリ、ナサイ。」

二 ハタケ



「デムカヘ」の挿し絵

カオリヤン、ノ、ホ、ガ、モウ

アンナニ、デマシタ。マメ、ノ

サヤ、モ、フクレ

マシタ。

ソラ、ハ、アラアラ

ト、ハレテ、スズ

シイ、カゼ、ガ

ファイテ、キマス。

アレ、ドコカ
デキリギリス
ガ ナイテ 杵マ
ス。

三 レングワ

ハタケ ノ ナカ ニ、コヤマ
ノ ヤウ ナ モノ ガ ミエマ
ス。クロイ ケムリ ガ デテ
杵マス。アレ ハ レングワ ヲ
ヤク トコロ デス。
キイコ キイコ。
一リンシヤ ガ
キマシタ。クロ
イ レングワ
ヲ タクサン
ツンデ 杵マス。
アソコ デ ヤ
イタ ノ ヲ、マチ ヘ ハコン
ダイク ノ デス。

四 ユフヒ

ヒ ガ ハイリマス。
アンナニ オホキク ナリマシタ。
アンナニ アカク ナリマシタ。
アノ ホホヅキ ノ ヤウ ナ
イロ ハ ドウ デセウ。
ヤア、モウ カクレハジメマシタ。
ムカフ ノ タカイ イヘ ノ
マドガラス ガ、キラキラト ヒ
カツテ杵マス。

五 ユフガタ

ニシ ハ ユフヤケ
アカイ クモ。
ヒガシ ハ マルイ
オツキサマ。
カオリヤン カツテ
ヒロイ ナア。
ドツチ ヲ ミテ モ

ヒロイ ナア。

『満洲補充読本・一の巻』昭和六年版(挿絵は省略)

一 マンシウ*

ソラ ノ ウツクシイ マンシウ。

ヒロビロ ト シタ マンシウ。

ワタクシドモ ハ

マンシウ ノ

コドモ デス。

二 サカミチ*

モヤ ノ

サカミチ

ノボツテ

イク ヨ。

サカ ノ

ムカフ ハ

オホキナ

ピヤウキン ヨ。

ミツ ノ ヤウ ナ

ソラ ダ ヨ。

ア、

ツキ ガ

デテル ヨ。

三 アソビゴト*

サクラ サクラ。

カゴメ カゴメ。

ポストアソビ。

グンカンアソビ。

マルケントビ。

ラカンサンアソビ。

トランプ、カルタ、

ブランコ、ワナゲ、

ベース、スケート、

スベリダイ。

ジャン ケン ポイ、

アヒコ デ ホイ、

アヒコ デ ホイ ヨ。

四 ハタケ (文は旧版の二に同じ)

五 エンソク*

ヒロイ ノハラ、

ホソイ ミチ。

オイシイ オムスビ、

ツメタイ オミツ。

クタビレタ アシ、

アタタカイ オフロ。

六 ランニング

五十メートル

ランニング。

ヨウイ、

ドン。

シロ カツ ヤウ ニ、

アカ カツ ヤウ ニ。

七 デムカヘ (文は旧版の二に同じ)

八 ユフガタ (文は旧版の五に同じ)

一口に言つて改訂の結果、石森の執筆した新教材を中心に、分量が大幅に増加すると同時に、質的にも大きな変化を来したことは明らかである (退職後の昭和八ないし十年の改訂でも石森はある程度の影響を与えていたと考えられる)。一般的に言えば編集技術も向上し、教科書としての内容は充実してきているといえる。文章も練れているし、教材の配列にも系統性とまとまりがある。同じ「デムカヘ」にしても改訂版では「アブナイカラコツチヘヨツテオイデ」までと「アア、アソコデス。……」以下との間を一行空けて間を持たせている (これは一種のドラマ的效果を狙つたものと見られ、石森が後によく用いた手法である) し、「アソビゴト」*・「エンソク」*・「ランニング」では行に段差をつけるなど表現にも工夫が見られる。北原白秋を思わせるような「サカミチ」*も当時としては新鮮な印象を与えたであろう。島木赤彦の作とされる童謡「ユフガタ」を除けば、『満洲補充読本』を代表するような教材は、やはり石森の改訂に

よって入ってきていることが理解できる。

一方最初の版はひたすら満洲の土の匂いを盛り込もうとしたように思われる。挿し絵などもいかに空とほけた感じで、内表紙のデザインもいかにものんびりした大陸的な風情がある。それが改訂版ではなんとなく日本人中心主義になり、進んでは日本の国家意識ないし国威発揚を思わせるような面が少しづつ出てきているとも言えよう。教材を現地 \parallel 満洲に取材するという基本方針は、一応受け継がれているのであるが、それと同時に、

(一) 現地の風物に取材するが、慎重に民族色を薄める。
(二) 満洲の付属地(\parallel 租界)の中の(日本内地とほぼ共通な)日常生活や、さらには現地と関わりのない一般的なものの、
(三) 明確に日本的なものを打ち出す、

というような傾向がかなり出てきている。

(一) の例としては、末尾の比較的長い物語教材が、「シロイコブタ」といういかにも中国的な民話から「キコリトオノ」という内地でもよく知られた寓話に替えられている。また「レングワ」のような土着性の強い教材は省かれていく。「バクタク」は内容がかなり変えられている。初版の「バ

クタク」には「シナノ、オシヤウガツ、ニハ、ナゼアンナモノヲナラスノデセウ」という箇所がある。これが昭和六年版ではどういう行事で爆竹を鳴らしているのかを不問に付した上で、「オホキナオトデスネ。ナゼバクタクヲナラスノデセウ」というきわめて一般的な表現に替えてしまっている。周囲の風物の民族性を曖昧にしている一例である。これと並んで挿し絵にも現地民(中国人)の登場する率がぐんと減少している。

(二) の例は非常に多い。最初の版では「コトリ」くらいだったのが、「アソビゴト」*、「エンソク」*、「ランニング」*、「ガクカウアソビ」*、「クダモノ」*などである。「サカミチ」*も大連の街を詠んだものであろうがこれに近い。また「コトリ」も「コモリウタ」(題としてはこの方が適切)と改題して残されている。つまり教材の大幅な増加は、この異郷性を感じさせない日常生活教材の増加に最大の原因がある。

(三) の例としては、昭和十年版では冒頭の「マンシウ」*で、「ワタクシドモハマンシウノコドモデス」と、しごくおらかな調子ながら、実は「この広大な天地は我が物ぞ」とまず宣言するのである。日本の侵略の最先端を担う

心意気を幼いときから育てようといわんばかりである。また「ラヂオ」では「トウキヤウノコ、エガトンデクル」というように内地を意識させている。こういう例は最初の版にはない。総じて最初の版の「異郷に住んでいる」という感じはかなり減少している。

このように「一の巻」だけとつても、子細に検討するとかなりの質的变化が認められる。その一番基本にあるのは、「敢えていえば〔大陸的〕リアリズム」から〔石森的〕象徴主義への転換ではなからうか。もういちど「一の巻」冒頭の数課を眺めてみると、大正十三年版は、事実をありのままに記し、一定の価値判断を誘うような形容詞の使用を慎重に避けている。それに対してそれこそ『満洲補充読本』を象徴する石森作の冒頭教材「マンシウ」*は「空〓美しいものだ」、「満洲〓広大なのだ」と端的に誘い込む。一年生の子どもは普通「空が青い」とはいつても、「空が美しい」とはいわない。「広々とした野原」は認識できても、そこから直ちに「満洲」という認識はでてこない。そこを誘導するのが石森独自の象徴主義的表現法である。「ワタクシドモハマンシウノコドモ……」に至ってはなおさらである。これは「ハナ／ハト」はもちろん、「サイタ／サイタ／サ

クラガ／サイタ」とも「アンズノハナガ／サキマシタ」とも異なる新しい国語教科書の教材であり、「おはなをかざるみんないいこ」ではじまる戦後の国定国語教科書に至るまで一貫した石森の国語教科書編纂方針の象徴ともいえるのではなからうか。

「一の巻」になると(一)としては、「しな村」*という課で、石森は男の子のこま回しと、女の子の足の裏を使う羽根つきを描いている。だが身近でありながらあくまで目に見えない壁で隔てられた別世界のことになっていく。日本人の子どもたちの遊ぶべき遊びとは考えられないのである。相手を同化はしても相手に同化されることは慎重に予防していると言える。これと全く同じ例が太平洋戦争下の『マンシウ 一』(在満・関東国民学校第一学年用、関東局在満教務部、一九四二年)に出てくる。満洲さらには他のアジア民族に対する日本人の基本的態度は、ずっと一貫しているのである。

(三)としては、「ぼくたちは」のように「一の巻」の「マンシウ」での宣言を引き継ぎ拡大する課が挿入されてくる。また「こほろぎずまふ」*のように、のどかな現地の風俗に題材を求めながらも、「しなのをじさんが日本ごではな

してくれ」る場面を入れて、日本語による同化を当然のものとする心情を育てようとしている。

「三の巻」には(一)「赤い服着た 村の子が／＼にくく顔で ながめてた」(小さな駅)というようにやはり現地の子どもとは交流がない。「たのしい慰安車」*では僻地でも高いレベルの生活の恩恵を受けられることを宣伝すると同時に、日本人は車の中で、「しな人たち」は外で映画を見るのを当たり前のように描いている。

(二)の例として「艦隊入港」、「守備兵さん」*。これに対応するかのように「おかあさんへ」*では鉄道を守る兵隊の様子が登場する。「四の巻」以降は満洲国成立以後の昭和八年の改訂、さらに日中戦争以後の昭和十三年の改訂でそれぞれ軍国主義的・国威発揚的な教材が大幅に増えていることは明らかである。ともに石森が教科書編輯部を去ったからの改訂であるが、外部から関与していた可能性はある。

「四の巻」の最初の版には「満洲には桜は少ないが、日本人は桜の花さへ見れば忽ち日本人らしい晴れやかな心持になる」(一巻)、「十数年前までは、日本では窓ガラスの製造は出来なかつたが、此の頃は技術も進み、ベルギ

ー・アメリカ合衆国などと肩を並べるやうになったさうである」(十五 窓ガラス工場)というように、日本人としての意識を喚起するように配慮された教材はあるが、明確に侵略行為にかかわる教材はない。しかし「五の巻」には、注目すべきことに「崩れた砦」*や「二勇士」のように明らかなる軍国主義的教材が、既に満洲事変以前の昭和三年の時点で取り入れられているのである。このうち石森の作とされるのは「崩れた砦」だけであるが、特に「二勇士」は渋谷孝が指摘するように、石森の思想を知る上で欠かせない教材である。¹²つまり四六判時代から明確な植民地教材を容認する、路線が既に確立していたと言えるのである。

こうしてみると『満洲補充読本』の起源そのものは石森ではないけれども、日本人用の補充教科書として内容的・形式的に完成させるのに力があつたのは、やはり石森であったということができよう。そしてそれは国定国語教科書の植民地教材と本質的につながる側面を始めから持つていたと考えられるのである。

最初に『満洲補充読本』をだれが構想したのかは明らかではないが、そこには保々隆矣に代表されるような一種の自由主義的な発想と中国の教育の評価とを認めることがで

さる。最初期の『満洲補充読本』が当時の中華民国の教科書と同じ体裁で作られ、しかもその内容がきわめて「大陸的」な土の香りのするものであったことからして、考える限りで最も現地主義的な発想で作られたことは確かである。それが石森にも何らかの影響を与えたとすれば、そこにはある種の積極的な意味があったとも考えられる。だが石森の参加以後（石森だけの影響ではないにせよ、満洲というよりはむしろ中国的な教科書が多分に日本化し内地化され、いわば「石森調」に彩られた『満洲補充読本』の内容と形態を作り出したのである。この意味において石森と『満洲補充読本』とは一つなのである。しかしその結果、現地満洲が「日本人にとって居心地のよい場所」であることにより大きな関心が向いて、現地の出来事や生活はまさにそれを彩る一種の風物に過ぎず、その歴史や民族などに對する切実な関心を一層呼び起こしにくいものになったのではなからうか。

この『満洲補充読本』は大変子どもたちに好まれたという。これは筆者の聞き取りによっても確かめられているが、八木橋によつて教師の立場からの証言を聞こう。

読本というから読解が主となる教科書のような感じを受ける。が、わたしには児童の表現を考慮しての教科書のようにも思われた。だから、子どもたちには、この読本が非常な親しみをもって迎えられた。子どもたちに、「明日は補充読本を持っておいで。」というとき、手をたたいて喜んだ。今日では教育課程の改善で、表現力のことが国語科の目的のなかに掲げられ、学習指導要領では、表現の学習指導から先に提示されるようになり、表現と読解との関連学習がやかましくいわれるようになってきた。が、「満洲補充読本」は、児童の表現指導は表に掲げてはいないものの、事実上表現指導に大いに役立った。わたしなどは、「満洲補充読本」を作文指導にどんなに活用したか、なつかしく思い出される。

さらに八木橋は、戦後満洲でしばらく残留している間に、石森の編纂した「いいこ読本」の内容を知り、「すでにこの教科書には、低学年から教材を学習することによって表現力を築くような細かな配慮が払われているのではないかと、わたしには思われてしかたがなかった」とも書いてい

る。⁽¹⁴⁾これは戦後の第六期国定国語教科書が、『満洲補充読本』の流れを引いていることの一つの証ともいえよう。

石森は確かに各方面に渡る優れた才能を持ち、熱心に研鑽を重ね、しかも人当たりが非常におだやかだったという。八木橋の伝えるところによれば、文部省に招かれて満洲を去る日の石森は大連埠頭で大歓送を受けている。石森の満洲での仕事は大成功であったと言えよう。この自信がその後の石森の仕事を支える大きな力になったのではあるまいか。

四、石森の国定国語教科書への参加と『満洲

補充読本』——『「あじあ」に乗りて』を

中心に——

周知のように、井上越編纂の「サクラ読本」の一つの特徴は、植民地関係の教材が急増したことである。石森も満洲を媒介にその一端を担うことになる。『満洲補充読本』から流用した石森作の「朝の大連日本橋」(ただし一部削除)、『ハナ・ハト本』にあった同タイトルの教材を『満洲補充読本』の石森による教材を利用して書き改めた「大連だよ

り」、そして石森原案による書き下ろしの教材『「あじあ」に乗りて」(巻十一第五学年後期用)がそれである。このうち「大連だよ」は石森により「大連から」と内容も表題もさらに書き改められて、『「あじあ」に乗りて』はほとんどそのまま、太平洋戦争期の「アサヒ読本」第五期本(初等科国語 六、同じく五学年後期用)に引き継がれるのである。中でも『「あじあ」に乗りて』は、第四期本の植民地教材の思想を代表するだけでなく、書き下ろしであるにもかかわらず、『満洲補充読本』とのつながりを多くもっている点で重要な教材である。その意味で石森と国語教科書との関係は、象徴的にいえば『「あじあ」に乗りて』に始まるといえよう。しかも石森はこうしたことが縁となって、国語教科書編纂のために電報辞令で文部省へ引き抜かれることになる。

小森陽一は「他民族の言語を奪うことが、子供同士のコミュニケーションや友情の成立の裏に潜在化させられた教材の典型」として『「あじあ」に乗りて』をあげ、次のように指摘する。⁽¹⁵⁾

この教材は満鉄の象徴的な存在であった特別急行列

車「あじあ」号で、日本の少年がおじさんの家へ一人旅をしているという設定になっている。日本語しか知らない少年が一人で旅ができるということ自体、満洲が日本語だけでやっていける地域に変貌したこと、つまり完全に日本の一部になってしまったことを暗示しているのでもある。(中略) 日露戦争の記憶が喚起されたうえで、主人公の少年にロシア人の少女が日本語で話しかけてくる。そして、少年はこのマルタという少女「と母親〓筆者」に熊岳城望小山の伝説を、日本語で語り聞かせることになる。(中略) 直接的な会話文ではないが、ここには現地(中国)の伝説を、日本の少年がロシア人の少女に日本語で語って聞かせるというきわめて意図的なしかけがある。一種おおらかで、インターナショナルな子供のかかわりの裏に、日本人が中国の伝説を日本語で外国人に紹介するという、文化の支配と被支配の構造がすけて見えてくるのである。(傍点〓原文)

井上越によればこの教材は、いわば伏線を成している「巻八」の「大連だより」にひきつづくものであり、「大連に

みられる石森延男氏にお願いして原案を作成していただいたものである」という(傍点〓筆者)。そして、「尋常五年程度の子供一人で、大連からハルビンまで旅行するといふことは、内地では一寸考へにくい図であるかも知れないが、そこは、植民地的な大胆さ、幾分荒削りで進取的な、国際的文化的な気性精神が現れてゐると見るべきである。ロシア少女と自由に語ってすぐ友だちになるなども、植民地における人種感を超越した日常生活から、自然に導かれる現象である。」と説明している。⁽¹⁶⁾

石森は「原案を作成」したのだという言い方は、この教材にも井上の筆が入っているということ予想させるが、それはともかくとして、石森自身も「参考」と題して、「ロシア人ともお話をする。満洲人とはもちろんお話ができる。五族協和といふ大きな人類理想に向かつて、歩をすすめていくのである」と同じ趣旨のことを語っている。⁽¹⁷⁾ なお主人公の少年がマルタ母子に語って聞かせる「望小山」の話は、『満洲補充読本』の「二三の巻」に大正十五年の初版からあり、石森の作ではない。

井上にせよ、石森にせよここではその国際化〓自由なコミュニケーションが、日本語で行われることをあまりにも

当然のようにみている。これはどちらかが片方に影響したというよりも、両者ともにそうだったと見るべきである。戦後になると今度はその裏返しで、外国人とは何でも英語でなければならぬかのようになり、思い込むのと対照的である。井上は「大連だより」がこの教材の「伏線」を成している、といっている。この「大連だより」という教材は、第三期から国語読本に登場しており、大連に転校してきた中学二年生が、知り合いの小学生に出した手紙の形を取っている。内容的には名所案内的な記述、つまり伝統的な地理的教材の一種である。第四期本の「大連だより」はそれを改訂したものであるが、「東洋一の煙突」の話など、『満洲補充読本』のなかの石森作の教材（『五の巻』の「日本人」）の中のエピソードも取り入れられており、改訂とはいえない。部をのぞいては旧教材の面影をほとんどとどめていない。むしろ明白な石森調に貫かれた新教材である。この点でも『あじあ』に乗りて」に次ぐ重要な教材だといえよう。

これに対して第五期本の「大連から」は、石森による改訂だが、「大連だより」と同じような内容でありながら微妙な相違がある。四年生宛の手紙の体裁は皆共通しているが、四期本の「大連だより」は大連へ転校してきた四年生

の子供が元の級友たちに出した手紙になっているのに対し、「大連から」では転勤してきた先生が元の担任の子供たちに宛てた手紙になっている（ただし、差出人の名前はどちらも同じ「木村正一」になっている）。両者に共通するのはどちらも「満洲人」（や外国人）たちの間にだんだん日本語が広まりつつあり、したがって中国語やロシア語などを知らなくても全く不便はないということである。ことに「大連から」のほうでは、日本語が各民族の共通語になりつつあり、また当然そうなるべきであるという立場が明白である。日本語流布の現象の観察だけなら四期本のように小学生でも十分だが、日本語の共通語化≠日本語学習強制の合理化を説かせるためには、やはり大人、しかも教師を主人公に仕立てたほうが都合だったのであろう。そのほかの点でも「大連から」のほうがずっと教示調の文章になっているのである。

ともあれ「大連だより」あるいは「大連から」は、単にあじあ号が大連から出ることの説明を「伏線」にしているのではなく、ロシア人でも満洲人でも日本語で十分話が通ずるんだよ、ということをお納得させるための「伏線」なのである。その意味ではまことに用意周到な教材配置がなさ

れているのである。いずれにせよこれは第三期本の「大連だより」にはみられなかった特質である。小森のいうように、「日本人の子供と現地の子供との間に成立する日本語によるコミュニケーションの中に、言葉による支配と被支配の関係を潜在させ、植民地の在り方を半ば感性化された領域で伝達する第四期教科書の植民地教材の特質は、第五期にいたってさらに強化されることになる」⁽¹⁸⁾のである。

だが石森にしてもはじめから、植民地における日本語によるコミュニケーションを当然のものとしていたわけでは必ずしもない。実は「『あじあ』に乗りて」の先駆的な作品ではないかと思われる教材が、その三年ほど前の昭和七年に改訂された『満洲補充読本』の「三の巻」に載っているのである。それは「おかあさんへ」という、題名だけでは一寸内容を推測しかねる作品であるが、やはり子供がたったひとりで汽車に乗って——ただし華々しい「首都」の「新京」ではなく、朝鮮半島との境の「安東」まで、それも多分に田舎の普通列車的なあまりぱっとしない感じの汽車で——おばさんの家を訪ねて行く話である。

おかあさん。／出発の時、私のよこの席はあいてゐま

したが、と中からロシア人の親子づれが乗りました。其のおかあさんは小さなトランクをひざに乗せて、その上で何かお手紙らしいものをえんぴつで書きはじめました。おとうさんは、あつい毛布をしいてよこになつてねむるともなしに目をつむつてゐました。こどもは頬づゑをついて、外ばかり見てゐました。(振り仮名は省略)

こういう書き出しではじまり、風が黄色いほこりを立てている様子、柳の木にかささぎの巣が多いこと、汽車の白い煙が電線や木の枝に絡まるありさま、日が落ちてからの陰鬱な感じ、窓ガラスに映る自分の顔など、女の子らしく(う)きわめて靜的に情景を描いている。そして夜九時に目的の駅に着くとおばさんが従姉妹と迎えに来ていて、汽車を降りると急に寒くなったので驚くという、正直に言つてかなり陰鬱な文章である。

日がおちてしまふと外が見えなくなつたのでつまらなくなりました。ふとガラス窓を見ると、私の顔が二重にうつつてゐます。窓が二重になつてゐるからでせう。

私は大きな口をあけてみました。すると窓の中の私も大きな口をあけました。頭をかいたら、あちらも頭をかきました。おかあさんからいただいたみかんをたべました。窓の中の私もやつぱりおいしさうにみかんをたべてみました。

一人旅が寂しくお母さんのことを思い出すあたりの設定は、『あじあ』に乗りて」と共通しているが、——ついでに言う石森の作品にはマザーコンプレックスを思わせるほど、よく母親が登場するが、これは本人も自認しているように、石森が早く母親をなくしたと関係があるようである——こちらは五年生どころか三年生の、それも少年ではなくて少女が主人公であるから、やや現実離れの観もある。ここでもやはりロシア人の親子が登場するのだが、母親だけでなく父親も一緒である。そしてここでは同席になるのに、この女の子は車中のロシア人の親子の様子を詳しく観察はしていても、最後までコミュニケーションが成立しないのである。この点はむしろ『あじあ』に乗りて」と正反対なのだが、常識的にはこのほうが通常はるかに現実の事態に近いのではあるまいか。それは当時満洲をよく

旅行していたと思われる石森自身の体験でもあつたらう。異文化・異言語の他民族に関心は抱いても、そう簡単にコミュニケーションは成立しないのが自然である。当然ロシア語で話し合っているはずの三人家族に、よほどのことがない限りロシア語を知らない日本人が参加できる余地はない。もしコミュニケーションがたまたま成立したとしたら、何かのきっかけがなくてはならないはずである。

ところが子供同士だと言語の壁があつても、コミュニケーションができるということはずつと起こりやすい。『満洲補充読本』の「三の巻」には、そうした状況を描いた「マーシャさん」という教材が、最初の版からずつと掲載されている（改訂のときに最後の部分が一部削除されている）。

七 マーシャさん

マーシャさんは誰だれとも仲なかよしです。とりわけ私とは仲よしです。お家も近い所にあるので、毎日行つたり来たりしてゐます。今ではおかあさんたちまで、おつきあひをするやうになりました。

マーシャさんは、せいが高くてにくつきがよく、さくら色のいきくしたほゝに、何時いつもにこにこと多くば

を見せてゐます、ゆうぎやたいさうの時などは、誰よりもくわつばつで、さうして唱歌が大へん上手です。或日の夕方、私はマーシヤさんと、いつものやうに公園に遊びに行つて、まりを投げたり、かけまはつたりしました。つかれたので、ベンチにこしを下して、今度は歌を歌ひました。青葉のかけには赤い夕日が美しく見えてゐました。

歌がをはると、マーシヤさんは、目をつぶつて考へごとでもしてゐるやうでしたが、急にあらたまつて、

「ねえ、ほんたうにあしぎではありませんか。私はロシア人で、あなたは日本人でせう。それが同じ組で、仲よしなんでせう。ほんたうにあしぎではありませんか。」

私はつい同じやうな心持になつていひました。

「ほんたうにあしぎですね。」(以下略)

これは初版が大正十五年の発行であり、石森の作品ではない。多少舌足らずではあるが、この教材では、子供同士の言語の壁を乗り越えたコミュニケーションを、大人の目でとらえたような感じは伝わってくる。だがここには白系

ロシア人に対する一種のエキゾチズムとともに、異民族に対する自覚も多少は存在する。それが異文化・異言語のレベルの問題を弱いながら予想させるのである。

「『あじあ』に乗りて」は、先の「おかあさん」を下敷きに、「マーシヤさん」の要素を加えて、さらに「望小山」の話をも利用して発展・成立した作品だといえよう。材料はすべて『満洲補充読本』に用意されていたのである。それにまさに日本の中国植民地化の象徴である、「あじあ」の運転開始(昭和九年十一月一日)、さらにハルビンまでの延長運転(昭和十年九月一日)という絶好の舞台が用意されたわけである。

石森はいう。「南満洲の背骨、満鉄本線、これこそ日本人が、かけがへのないものとして贏ち得た生命線である。こゝを心臓部にして、満洲国は生れ、北支那は展け、蒙古は明るくなつていく。いはゞ東洋の曙光は、この線上に胚胎してゐるといつてもよからう。この重大な地点を学ばせたい。……本課によつて、躍進日本の一端をのぞかせることは大事なことであらう」。

一種の難民である白系ロシア人に対するエキゾチズムは、日本人の白人コンプレックス(中国人の子どもの交流

を描いた教材は存在しない」を反映して、石森だけにとどまらず満洲には普遍的だったし、軍国調が厳しくなっても、教材には最後までさまざまな形で登場する。「マンシウ一」には本来「五族協和」の対象には含まれないはずの白ロシア人の少女が割り込んで、その結果「漢・滿・蒙・日・鮮」のはずの「五族」が「滿||漢・蒙・露・日・鮮」になってしまっている教材がある。同時に「おかあさん」の段階と「あじあ」に乗りて」の段階との違いは、前者ではまったく相手にしてもらえなかったのが、今はそのロシア人とさえ対等に話ができる、いや向こうから日本語で話しかけてくる、というところに核心があるであろう。

「躍進日本」という錦の御旗を前にしては、「マーシヤさん」に見られたような、異民族とのコミュニケーションの成立の不思議さに対する感動も、「おかあさん」にみられるような異民族とのコミュニケーションの壁の自覚も、もはや成立する余地はない。異民族とのコミュニケーションは躍進日本にとってごく当然の現象であり、そのメディアアはいうまでもなく日本語であることに何の疑いももたれなくなっているのである。

注

(1) 従来『満洲補充読本』は、大正末より昭和初期の実態がよくわからなかったが、大正十三年から順次初版が発行された「一の巻」より「四の巻」(四六判)を、最近ソウル大学図書館で見つけた。なお『満洲補充読本』と『国民科大陸事情』とのかわりについては、拙論「在滿・関東国民学校のカリキュラムと教科書」、『関東教育学会紀要・第十七号』、一九九〇年九月参照。

(2) 八木橋雄次郎「石森延男先生と国語教科書」、『石森延男国語教育選集・第五巻』、光村図書、一九七八年、四九三頁。

(3) 渋谷孝「解説」、『現代国語教育論集成・石森延男』、明治図書、一九九二年、四八一頁。

(4) ただし表記法は版により若干異なる。たとえば、「高梁」の表記は、最初の版(大正十三年)では「カオリヤン」だったのが、改訂によって「コウリヤン」(昭和六年版)・「コウリヤン」(昭和十年版)となり、国民学校時代には内地でも満洲でも等しく「カウリヤン」(「ヨミカタ 二」および「マンシウ 一」)となった。最初のものは中国語の発音に準じて表記しており、改訂ではこれを日本人に読みやすいように変えたのであろう。国民学校時代には「高」は「コウ」と読むが読み仮名は「カウ」だということから「カ

ウ」でなければいけないとされたのではなからうか。もっともそれなら「カウリヤウ」としなないと中途半端である。

軍歌「橋中佐」の「霧立ちこむる高梁の」は、「コウリョウ」と歌っていたし、国定第四期本の「大連だより」でも「高梁」には「かうりやう」と振り仮名がしてある。なおこの

「西ハタヤケ」は、前掲『石森延男国語教育選集第五卷』五二六頁では石森の作とされているが、井上越著・古田東湖編『国語教科書編集二十五五年』（昭和五九初版、武蔵野書院）では井上越の作とされている。今は前者によっておく。

(5) 前掲、『石森延男国語教育選集・第五卷』、年譜、同書五一九頁。

(6) 渋谷孝「解説」、前掲書四八三頁。

(7) 石森延男『満洲補充読本の誕生』、『満洲補充読本 復刻版内容見本』、一九七九年。

(8) 渋谷孝「解説」、前掲書四九二頁。これに関連して付言すれば、石森の前文でいう「国境を越えなまらず」とはどのような意味であろうか。『満洲補充読本』は日本人用の教科書であり、現地民とはかわりがなかった。だからこの「まらず」は決して日中相互的なものではなく、かつて「満洲」で活動した日本人の一方的な郷愁を誘い出すものにな

ぎない、というおそれはないか。「中国東北部（満洲）」を「異郷」だと思えないという心情は、「異国」を「異国」と認めつつ、なおかつそこに相互に意味のある普遍性を追求しようという、国際的な交流や親善と同質なものでありうるのだろうか。

(9) 八木橋雄次郎、前掲書、四九六―七頁。

(10) 『南滿教育』第五十号（大正一四年七月一五日発行）の「教科書編輯部便り」で南滿洲教育會編輯部職員全員が紹介されているが、日本人教育と中国人教育の双方にわたってかなり充実した構成をとっている。『満洲補充読本』の担当である「各科編輯委員」の「小学校の部・国語科」のメンバーは、主査Ⅱ大出正篤（編輯部主事）、委員Ⅱ矢沢邦彦（鞍山中学校長）、国本小太郎（大連朝日小学校長）、湯下誠一郎（編輯部編輯員）、今永茂（同）である。石森がこの一員に加わってからの構成は現在未詳である。

(11) 渋谷孝「解説」、前掲書四八二―三頁。四八二頁に「全六卷」とあるのは誤植であろう。

(12) 渋谷孝「解説」、前掲書、四九二頁。「三勇士」（ハルビン郊外で日本軍スパイ沖・横川の両名が銃殺された事件を描く）は石森の作ではないことになっているが、このエピソードに結びつけて石森が一種の言靈的な言語観を説く部

分は、石森の思想解明に不可欠である。しかしこの点については改めて論じたい。

- (13) 例えば昭和十年代前半に関東州で小学校に通ったある女性に、次のように語っている。「――『満洲補充読本』は皆さん(友人たち)に聞いても印象の深い面白いものでした。(中略)これは割に気楽に使われたわけなんです。先生も。これは読めばいいんだ。漢字も別に覚えなくていい。気楽に好きなところを読んで、全部読んだわけじゃない。(中略)中身もこちらの方が(ずっと面白い)。――私の記憶では国語の時間には必ず(国定国語読本と)両方揃えて持ってくるように。すると先生は、そのときによって「今日はこちらをやる」。(割合としては)「国語(読本)」が主、時間が余ったような時にこちら(補充読本)にも触れて、みんな喜んで。」(『教科書研通信』第六号、一九九一年四月二〇日)

- (14) 八木橋雄次郎、前掲書、四九八頁。

- (15) 小森陽一「国語教科書における植民地教材」、『成城学園教育研究所研究年報・第八集』、一九八五年一月、一二頁。
一一二頁。

- (16) 井上越「要説」、国語教育学会編『小学国語読本総合研究・卷十(上巻)』、岩波書店、一九三七年、三〇九頁。

- (17) 石森延男「参考」、国語教育学会編前掲書、三二〇頁。

- (18) 小森陽一、前掲論文、一二三頁。

- (19) 石森延男「参考」、国語教育学会編前掲書、三二〇頁。

あとがき

本稿は一九九一年度に成城大学特別研究助成費を受け、共同研究「戦後改革の総合的研究」の研究報告の一部をなすものである。

野村章氏からは大変貴重な資料を提供して頂いたことを深く感謝したい。

本文中敬称は一切省かせて頂いた。